



2011年7月26日号
通巻1164号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会
〒920-1192 金沢市角間町
Tel.076-262-6009 角間内線 2105
E-MAIL kanazawa@ku-union.org



金沢大学版

地球の歩き方

タイ・イサーンを旅して

赤堀康子(四分会 OG)

2011年冬、初めて東南アジアへ行って来た。きっかけは6年前に金大医学部で論文博士を取得したタイ人のW先生が故郷のコーケン大学に戻ったと知ったからだ。彼女の在学中は生活面でサポートしたり、また四季のある日本の自然や文化をこよなく愛した彼女と近隣をドライブしたりもした。退職して10ヶ月、懐かしいW先生との再会を口実に真冬の金沢を抜け出した。

タイへ入る前に先ずアンコール・ワットに行ったのだが、いきなり30℃を超える暑さと乾季故の土埃に閉口しながら2泊3日で遺跡を回る。世界中からの観光客でごった返すシェムリアップを後にバンコク・スワンナプーム空港へ。さらに国内線に乗り換え約1時間、コーケン空港でW先生が出迎えてくれる。タイ東北部メコン川の流域にあたる広大な台地イサーンが先生の故郷だ。大規模な農業地帯だけあってイサーンの中心地コーケンの大学には農学部があり、地域農業の中心を担っている。広いキャンパスでは折り良く農業祭が開催されており、各種ブースを回って先生の仕事中も飽きることがなかった。5日間ほどの滞在中、授業の合間をぬって先生が愛車の95年型カローラで近辺を案内してくれた。敬虔な仏教徒である先生といくつものお寺を巡った。日本ではなじみの薄いキンキラに輝く寺院に初めは当惑したが、真っ青な空と相まってだんだん目に慣れてきた。またこの地域一帯は恐竜化石発掘地としても有名で、りっぱな恐竜博物館ができています。見渡す限り山らしい山がなく、乾季の終盤、どこまでも続く乾いた台地を眺めていると今恐竜がそこに現れても不思議でない気がしてくる。そして一緒に食べた美味しいイサーンフードの数々、ガイ・ヤーン(焼鳥)、パパヤサラダ、ココナツ、カオニャオ(糯米) etc.



▲どこまでも続く乾いた台地イサーンとW先生



▲コーケン大学農業祭にて シルクの糸取り作業



▲青空の下金色に輝く九層の寺院 ワット・ノンウエン

4日目に一旦タイを離れ、一人でラオスの世界遺産ルアンパバンを訪ねることにした。国境の町ノンカーイまで北上し、大河メコンを目の当たりにする。ここではまだそれほど川幅が広くはないが、対岸は外国かと思うと興奮する。しかしメコンにかかるタイ・ラオス友好橋をバスで渡ってラオスに入ると、外国へ来たというよりも川を越えて隣町へ来たような感じだった。タイ人ラオス人はパスポートを見せるだけでOKだ。それほどイサーンとラオスの結びつきは深く、農村地帯の風景や住居・食べ物もほとんど変わらないし、古来国境も曖昧だったようだ。W先生のルーツもラオスだそう。国境の町ターナレーンを経て、町並みや食文化にフランス植民地時代の名残を色濃く遺すビエンチャンとルアンパバンに行った。それについては今回割愛するが、ラオスはメコン川に沿っていつかまたゆっくり行きたいところだ。穏やかで誠実なラオス

の人たち、心底かわいい子どもたちが忘れられないからだ。帰りのラオスからタイへの入国審査は麻薬捜査犬を使う厳しいものだった。ツアー客よりも私のような単独のバックパッカーは標的なのかしきりに私を嗅ぎまわる。実はこのワンちゃん、私がザックに入れていたフランスパンのサンドイッチにご執心だったのだ。



▲メコンに沈む夕日 ビエンチャンにて



▲水上レストランで
メコンの魚、パパヤサラダ、糯米他

ラオスから再びタイに戻ってW先生に会い、一人旅に自信がついたのでカンボジア国境のクメール遺跡カオ・プラビハーン（クメール語ではプレアピヒア）へ行きたいと話すと、タイ語が全くできない私が一人で紛争地帯へ行くのは危険だと心配される。そこでナコーン・ラチャシーマ（コーラート）のピマーイ遺跡に行くことにした。翌早朝お世話になった先生とコーンケン駅で別れる。20分遅れでゆったりと到着したバンコク行き鈍行列車は100年前のディーゼル機関車で、時折窓から入ってくる煤が懐かしい。運賃38バーツ（約100円）の硬座の車輜は庶民の足だ。駅ごとに物売りが乗り込んできては大きな串刺しの焼き鳥、茹でとうもろこし、ご飯、サラダ、菓子、飲み物などを売り歩き、次の駅で降りて行く。窓の外をイサーン独特の風景が流れ過ぎる。サトウキビの刈り取り、植えられたばかりの田んぼ、畑に点在する牛たち、熱帯の巨木の下でのんびりと休む人、高床式の農家、遠くに見える広大なキャッサバ畑……。

コーラートでバスに乗り換えようと右往左往していた時、偶然出会った日本人のおじさんが親切に教えてくれる。バスで1時間ほど走るとピマーイ、9～13世紀の広大なクメール帝国の北西部の中心地だったところだ。30年ほど前に修復された神殿はアンコール・ワットと同じ様式で中央祠堂と両脇の塔の3塔からなり、ヒンドゥの神々と仏陀が混在している。有難いことにアンコール遺跡と違いほとんど観光客がいない。誰もいない静かな遺跡の夕暮れ時をどっぷり古代に浸って過ごした。翌朝、昨日行った遺跡から1kmほど離れた市場でふと振り返ると遺跡からまっすぐ延びた石の道。そこは



▲3つの塔からなるピマーイの神殿遺跡

神殿の外門で、往時はさらに南へ約300km先のアンコール・ワットまで続いていたという。その賑わいを想像しながら名残残さないイサーンを後にする。高速バスでバンコクに着くと、テレビではタイ・カンボジア両軍がプレアピヒアの領有権をめぐる戦いを交戦し、死傷者が出て住民が避難というニュースでもちきりだった。W先生の忠告に従って、そこへ行かなかったのは正解だった。

地方から大都会バンコクに出て来た私を迎えてくれたのはバンコクっ子のS先生。彼女も昨春金大の博士課程を修了し、故国に戻って就職した人である。忙しい中、週末を割いて春節で賑わう中華街やきらびやかな王宮、水上マーケット・アンパワーなどを案内してくれた。聡明で快活な彼女のおかげで旅の終わりを楽しく締めくくることができた。私にとって娘のような彼女たち、故国を離れ言葉はもちろん、気候も食べ物もこんなに違う日本で3年、4年とよくがんばったなあと思ふ。メコン中流域の国々カンボジア、タイ、ラオスを巡り、2月初め真冬の金沢へ帰る。イサーンの乾いた青空に染まって呆けていた私の脳天にパンチを喰らわしたのは玄関先に積み上げられた雪の山だった。



▲神殿の外門からアンコール・ワットまで南へまっすぐ延びる石の道

帰国後しばらくして起こった東日本大地震と原発事故により、その時の感動は遥かに遠のいてしまっていた。しかし3ヶ月経って、たまたま編集者から依頼があった時、今自分にできることはしておかなければと思い旅行記をまとめることにした。



午前十時の映画祭

—古い名画を大スクリーンで観る楽しみ—

杉山欣也（歴史言語文化学系）

組合でもらったシネモンドの招待券をきっかけに、映画館に通うようになった。たとえば授業のない日に朝1の上映を観て、ご飯を食べてから角間行きのバスに乗る。3時間近い映画を観て、午後の香林坊に出ると荒んだ気持ちになるという難点はあるが、自分の研究領域とも重なるわけだし、これも仕事だ、と頭の中で言い訳している。…ようは平日の日中に映画を観る自堕落な楽しみにはまっているだけなのだ。

昨秋に観た「トロッコ」は芥川龍之介の原作を換骨奪胎し、台湾の戦後を生きる古老の心情を描いた作品。監督は川口浩史で、これが初監督だ。以前「春の雪」で時代考証のお手伝いをしたとき助監督だった方で、妻夫木聡の頭をボウズにするか一緒に調査した仲なので、エンドロールで彼の名前をみてうれしかった。この春に上映された「英国王のスピーチ」は、第二次世界大戦を目前に突如国王となったジョージ5世が、闇医者とふたりで吃音を克服し、国民を鼓舞するスピーチを行う物語で、総理大臣からツイッターまで脆弱な言葉ばかり消費される日本の状況を思うと意義深いものがあつた。先日はゴダール映画祭があつたので「勝手にしやがれ」を観てきた。当時としては斬新だった映像手法も今では古典的な調和として観ることができる。名作と呼ばれるゆえんだらう。

昨秋、学会の帰りに立ち寄った神保町シアターで「東京物語」が上映されていたので観てきた。テレビでは何度も観たし、DVD（最近500円以下で買える）ももっているが、やはり映画館で観ると発見がある。小津映画の特徴として、笠智衆の台詞まわしに代表される独特の「間」がいわゆる、それが観客の泣き笑いの「間」と一致した心地よいリズムになっていることが分かったのだ。

こういう訳で、古い名画を大スクリーンで観る楽しみを知った。とはいえ金沢では難しいかなと思っていたら、イオンシネマ金沢フォーラス店で「午前十時の映画祭」をやっていることに気づいた。これは毎週1本の名画（洋画）を50本連続上映、すべてオリジナルニュープリントフィルム

使用という大企画で、この2月からやっている。この催しに気づいたのは新学期直前。すでに「十二人の怒れる男」から「ウェスト・サイド物語」まで終わっており、「雨に唄えば」「アラビアのロレンス」は新学期の多忙ゆえに諦めた。家族サービス優先の原則に基づきゴールデン・ウィーク中の「ベン・ハー」「お熱いのがお好き」は行かなかった。ようやく観たのは「ライムライト」だった。名作中の名作だが、チャップリン演じる道化師とバレエダンサーの物語はさすがに俗臭ただよう。むしろ注目したのは道化師最後の晴れ舞台のアンコールで共演したバスター・キートン。小芝居のおもしろさとチャップリンとの間合いの妙がよくわかっておもしろかった。

先週は「大脱走」を観た。スティーブ・マックイーン以下、名だたる名優が登場するが、今回になったのは敵方の捕虜収容所長だった。彼はゲシュタポに対して「ハイル・ヒトラー」の敬礼をしる。そして命を落とした脱走兵50名のリストをみたときは、彼らに心の奥で共感しているようすがよくわかった。彼も脱走兵同様の空軍軍人なので、敵味方を超えた騎士道的共感がヒトラーへの忠誠に先立つのだろう。ハラハラドキドキの3時間、1000円は安すぎると思った。

この「午前十時の映画祭」、来年1月の「カサブランカ」「第三の男」までまだまだつづく。個人的に「ひまわり」が入ってないのが残念だが、いつかどこかで巡り会うことに期待しよう。それにしても気づいたときすでに「ミクロの決死圏」が終わっていたのは痛恨の極みだ。角間にいるとこういう良い情報を得、鑑賞する機会が減る。学生にも観てほしいのに残念だ、などとふたたび自堕落の言い訳をして本稿を終えよう。



全国の映画ファンの投票をもとに、1950～1970年を中心とした映画黄金時代の外国作品の中からセレクトした映画を上映する。毎朝10時から一年間にわたり上映する特別企画です。

詳しくはこちら↓

<http://asa10.eiga.com/>

おすすめ!

ちやんぽんは店



今回紹介するお店は笠舞本町にある中国料理のお店「白龍門」。実はこのお店、前のオーナーさんが店を始めから23年、今のオーナーさんになってから12年という老舗です。

この「白龍門」のおすすめポイントは2つあります。1つは「体にやさしい中国料理を楽しめる」ということ。どうしても中国料理と言えば、こってりしているイメージがありますが、「白龍門」の料理には店主こだわりの食材や調味料が使われており、野菜も多めでとてもヘルシー。最近食べた「天あん門プレート」は天津飯とあんかけ焼きそばが乗ったボリューム満点の一品でしたが、意外にあっさりしていて、いくらでもおなかに入っていきます。特に最近では「羅漢果（らかんか）」と呼ばれる健康や美容によいと呼ばれる素材を使った料理を作っているとのこと。その他にもエビチリや酢豚はどれもおいしく、食べれば体も心も元気いっぱいになること間違いなしです！



ボリューム満点!
「天あん門プレート」



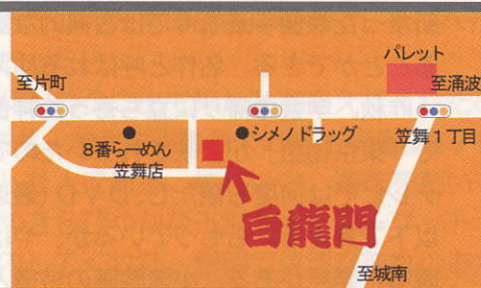
さらにもう1つのポイントは「子供連れにやさしいこと」です。お店の2階には3つの個室があり、特に一番大きい部屋には、子供用のおもちゃやなんとジャングルジムまで備え付けられており、大人は他のお客様の目を気にせず、子供たちを遊ばせながら食事を楽しむことができます。

日々仕事に、そして家族サービスにがんばっているそこのお父さんお母さん、ぜひ「白龍門」に行き、体にやさしい中華料理を食べ、夏に向かって元気を取り戻しましょう！



白龍門 Data

住 所／金沢市笠舞本町1-2-39
電話番号／076-263-8960
営業時間／11:00～14:30
／17:00～22:00
定 休 日／火曜、駐車場有



後編 編集



『ゆにゆに』1164号をお届けします。現執行委員会担当の2号目です。その間、東日本大震災がありました。これが理由ではありませんが、担当年度内3号発行という大見得は達成できませんでした。回数より中身ということでご勘弁ください。旅行記事はタイ、映画評としては午前十時の映画祭、そしてグルメは中華料理。今回も原稿依頼を快くお引き受けくださり、しかも、締切前にきちんと提出してくださり、大変有り難く思っています。発刊が遅れてしまったのは、締切までに編集後記を書かなかった私のせいです。なお、前号と同様、原稿依頼からレイアウトまでの編集作業はすべて高橋さんがしてくださいました。この場をお借りしてお礼申し上げます。(N)